

## 「てみる」「ておく」と「ない」との共起

橋 本 修

キーワード: 「てみる」, 「ておく」, 否定, 対極表現

### 要 旨

「てみる」と否定辞、「ておく」と否定辞との共起について、『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』を対象に調査を行い、前回調査(橋本・松本2000「「てしまう」と「ない」との共起について」『筑波日本語研究』5。以下「前稿」と呼ぶ)との比較を行った。

結果の概略は、「てみる」「ておく」とも、全体としては否定辞との共起率は「てしまう」のそれより高く、「ておく」の場合には「ている」と否定辞との共起率をも大きく上回る。しかし、出現場所を主節に限定し、否定辞の方に「慣用形を除く」・「命題内否定、かつ、もっとも単純な形」というような条件を付けた場合には、「てみる」「ておく」も「てしまう」同様、共起率は「ている」より相当に低く、特に「てみる」の場合は「てしまう」に近い状況を呈する。一定の条件の下では、少なくとも「てみる」はある種の肯定対極表現であると言える。このことは、「てしまう」、ひいては古典語の「つ」「ぬ」のような広義完了形式が否定辞と共起しにくいことについて、その個別的意味が原因となっているという説明に、一定の疑義を投げかけていることにもなる。

### 1. はじめに

現代日本語にはいくつかのタイプの否定対極表現が知られており、先行研究も多いが、否定と共起しにくい、肯定対極表現については、(存在の指摘は皆無でないと思われるが)分析はあまり進んでいない。本稿筆者は前稿(橋本・松本2000)において、『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』における「てしまう」と否定辞の共起調査から、「主節内」「否定辞が(慣用句・命題外否定を除く)典型的否定」という条件の下では、「てしまう」は肯定対極表現としての性格を濃厚に持っていることを明ら

かにした。

本稿ではそれに続き、補助動詞「てみる」「ておく」(注1)と否定辞の共起に関し、前稿とほぼ同じ条件で調査を行い、この二つの補助動詞が、肯定対極表現としての性格をどの程度持っているのかを探る。「てみる」「ておく」のどちらか、あるいは両方が「てしまう」同様に、肯定対極表現の性格を持っているということになれば、これらが否定辞と共起しにくい原因を探る手がかりについても(間接的であるが)益するところがあると考ええる。

## 2. 調査の概要

調査の概要は、「[CD-ROM 版 新潮文庫の100冊]」の、日本人作家作品全て(港末「用例資料」参照)から、「てみる」「ておく」を全て抜き出し、否定辞(主に「ない」)との共起数を見る」というものである。より具体的には、

- a 「[CD-ROM 版 新潮文庫の100冊]」の該当テキストから「てみる」と「ておく」を、すべて抜き出す。
- b 抜き出された「てみる」「ておく」を
  - ・主節内か従属節内か(注2)
  - ・主節内のものに関し、述部全体の語形がどのようになっているか(下接している形式がどのようなものか)
  - ・否定形式(主として「ない」)の機能の種類(単純な命題内否定か、モダリティ内否定か、慣用句的なものか、等)等の観点から分類する。
- c 分類したものの、否定表現と共起している例と共起していない例の用例数をまとめ、比較検討する。(「否定表現と共起」といっても、ある意味当然ながら「同一節内」での共起)に限っており「[太郎が気づかないように] 二郎が隠しておいた」のようなものは共起と認めない)。

というものである。

用例の抽出に関しては、本稿が存在する可能性があると想定した語形(例えば「てみー」「て見ー」「ておー」「て置ー」等)を順次検索し、その後該当例かどうか、どこに分類されるかを判断した。調査結果の誤差については、

- ・分類される箇所によっては用例数が相当な数になっており見落としがあり得る。
- ・本稿が想定しなかった語形で該当する例がある可能性がある。
- ・文章では、(主節・従属節の区別等)一部の分類基準は、(筆者の内省判断によるなど)再現可能なほどに示せず、判断のゆれの起こる箇所がある。

等の理由により、一定の誤差は確実にあると思われるが、その誤差は本稿の主要な趣旨を動かさない程度のものであると判断している。

### 3. 調査の結果と考察

#### 3.1. 調査結果(1)

調査結果の概要を示す。部分的な詳細は、次節以下に示す。

- (1) 「てみる」総用例 5126例  
うち、「ない」「ず」との共起例 152例  
「ない」とも「ず」とも共起していない例 4974例
- (2) 「てみる」と「ない」「ず」との共起例(152例)のうち、  
主節内のもの 84例  
従属節内のもの 68例
- (3) 「てみる」が「ない」とも「ず」とも共起していない例(4974例)のうち、  
主節内のもの 2090例  
従属節内のもの 2884例
- (4) 「ておく」総用例 2086例  
うち、「ない」「ず」との共起例 185例  
「ない」とも「ず」とも共起していない例 1901例
- (5) 「ておく」と「ない」「ず」との共起例(185例)のうち、  
主節内のもの 95例  
従属節内のもの 90例
- (6) 「ておく」が「ない」とも「ず」とも共起していない例(1901例)のうち、  
主節内のもの 769例  
従属節内のもの 1132例

比較検討のために、前稿(pp.3-4)で挙げた、「てしまう」「ている」のデータを挙げる(「ておる」は用例数が少ないので省略する。前稿注3参照)。

- (7) 「てしまう」総用例 11095例  
うち、「てしまう」と「ない」「ず」との共起例 116例  
「ない」とも「ず」とも共起していない例 10979例
- (8) 「てしまう」と「ない」「ず」との共起例(116例)のうち、  
主節内のもの 84例  
従属節内のもの 32例
- (9) 「てしまう」が「ない」とも「ず」とも共起していない例(10979例)のうち、  
主節内のもの 7641例  
従属節内のもの 3338例
- (10) 「ている」総用例 119152例  
うち、「ている」と「ない」「ず」との共起例 4460例  
「ない」とも「ず」とも共起していない例 114692例
- (11) 「ている」と「ない」「ず」との共起例(4460例)のうち、  
主節内のもの 3108例  
従属節内のもの 1352例
- (12) 「ている」が「ない」とも「ず」とも共起していない例(114692例)のうち、  
主節内のもの 76016例  
従属節内のもの 38676例

前回調査における「てしまう」「ている」は主節における用例数の方が従属節におけるそれより(否定辞との共起例・不共起例ともに)多いが、「てみる」「ておく」は、従属節における用例数の方が多い場合がある(否定辞との不共起例)。これは否定辞との共起関係には影響を及ぼしていないようであるが、調査中の印象としては、「てみる」の場合「言ってみれば」「考えてみれば」等、「ておく」の場合「言っておくが」「断っておくが」等の、定型的な従属節表現の多さが目立った。

また、今回の調査における、否定辞との共起例は、従属節より主節の方に、かなり高い比率で現れる。この点も、基本的には個別の語彙的問題と思われるが、「～してみないか」「～しておいてくれないか」のような、命題外否定、特に、否定疑問形による勧誘・依頼表現が多いことが大きな原因になっているようである。

各形式の、総用例に対する、否定辞との共起例の比率を見ると、

(13)	「てみる」	5126例中、	152例	約3.0%
	「ておく」	2086例中、	185例	約8.9%
	「てしまう」	11095例中、	116例	約1.0%
	「ている」	119152例中、	4460例	約3.7%

となっている。「てみる」においても比率は「てしまう」より「ている」に近く、「ておく」においては「ている」の場合の比率をも大きく上回る。このように見ると、「てみる」「ておく」の否定辞との共起率は「てしまう」に比べかなり高く、この数値からは否定辞との共起に関して否定的な傾向を見て取ることは困難である。前回調査では、上のデータのうち「てしまう」と「ている」を比べ、「てしまう」が否定辞と共起しにくいことをここで既に反映していると考えたが、これは早計であった。

### 3.2. 調査結果(2)

ここでは、主節内に現れた、「てみる」「ておく」と否定辞との共起例を中心に検討する。

#### 3.2.1. 主節内の「てみる」

主節内の「てみる」と「ない」「ず」との共起例は84例であるが、これらの述部語形を概略的に分類する。スペース等の都合上、分類の仕方は、前稿3.2.節と若干変わっているが、最終的な結論に対しては影響を及ぼさないように配慮しているつもりである。

- a 「ない」「ず」が慣用句(「～なくてはならない」等)の一部をなすもの：18例
  - 「てみなければならない」およびその派生形：3例
  - 「てみるしかない(なかった)」：3例
  - 「てみないわけにはいかなかった」：2例
  - 「てみたかっただけなのかもしれない」：1例
  - 「てみるかもしれません」：1例
  - 「てみたかもしれなかった」：1例
  - 「てみたくてならなかった」：1例
  - 「てみたくてならんのでしたよ」：1例
  - 「てみてかまわない」：1例

「てみなけりゃ」：1例

「てみるにちがいない」：1例

「てみるまでもない」：1例

「てみるよりない」：1例

- b 「～ではないか」等、慣用句とは言えないが、出現位置、文脈等から見て「ない」「ず」がモダリティを担う形式の一部として機能している(命題内否定でない)もの：58例

「てみないか」「てみませんか」等、「てみる」+「ないか」の形、およびその派生形：38例

「てみようではないか」等、「てみる」+「ではないか」の形、およびその派生形：9例

「んじゃないか」(「のではないか」の派生形)：1例

「てみない？」の形：9例

「てみるんじゃないんですよ(命令的な用法)」：1例

- c その他：8例

84例のうち、a、bの76例が、否定の典型的用例でないことが分かる。「てみる」と典型的否定の「ない」「ず」との共起例は、cの8例中に存在する可能性があることになるが、以下、その8例を挙げる。

- (14) 加藤は分りきったことを聞いた。朝からずっと口をきかなかったから、話し【てみたかったのではない。】道端にしゃがんで、妙なことをした男になんとはなしに興味を持ったから話しかけてみたのである。[新田次郎]
- (15) 「おれたちは」とかれは追いつめられていった。これはどういうことなんだ、おれは自分の腕の中へ脱走した兵隊がとびこんでくるなんて【思ってみもしなかった。】しかしおれたちが配ったパンフレットは兵隊を脱走させるためにそのすべての機能をつかっているというべきではないか。[大江健三郎]
- (16) そういう彼の心理や意識は、彼とともに未練気もなく減び去ったのだし、彼の歌が独り減びずに残っているのも、そういうものの証しとしてではないのだから。歌はもっと深い処から生れて来る。精緻な彼の意識も、恐らく彼の魂が自ら感じていた処まで下っ【てみはしなかったのである。】[小林秀雄]

- (17) 太郎は落ちつかなく電話の傍を離れた。それから、まるで何かに狼狽したように駅の改札口を出た。まだ外は雨だった。何か考えなければならないことがある、と太郎は思った。自分はまだ自分の心理の一部を、とり出してゆっくりと改めていない。そこにスポット・ライトを当てて観察し、その臭気を嗅い【でみていない。】〔曾野綾子〕
- (18) 「車の音がするから出てみたの。表に出てみたのよ。あんた、うしろを見なかったでしょう？」  
「ええ？」  
「見なかったわよ。どうして振り返っ【てみなかったの？】」  
島村はおどろいた。〔川端康成〕
- (19) 彼女は警戒心の強い野良猫でさえ気を許すような、とろけるような調子で言ったものだ。「さあさあ周ちゃま、蔵王山はもう帰りましたよ。もうどこにもいやしません。さあさあ、婆やがちゃんとおんもまで行って見てきたのですかね」そのくせ彼女は、この溺愛する男の子のことを、意気地なしだとか弱虫だとかとは露ほども思っ【てみなかったのである。】〔北杜夫〕
- (20) 「土屋君は『懺悔録』を御読みでしたか」と文平は談話を引取った。  
「否、未だ読ん【で見ません】」こう銀之助は答えた。  
「何かあの猪子という先生の書いたものを御覧でしたか——私は未だ何にも読ん【で見ないんですが】」〔島崎藤村〕

これら8例は、いずれも「ない」が命題内否定である可能性を持つ。ただし、「てみる」と「ない」「ず」との最も単純な共起の形である「てみない」（に準じた形）は、さらに少なく、(14)～(17)の4例は、「てみる」と「ない」との間に、「の(だ)」「は」「も」「ている」のような、別の要素を挟んでの共起である。(17)の「のではない」に関しては、「ない」がモダリティ内否定であるという解釈も残している例である(野田1997他参照)。(18)についても、「どうして」を含む疑問文に現れる例であり、反語的色彩も濃い。

(19)は形の上では典型的共起例とみなせるが、やはり若干の問題がある。「思ってみる」という形は、「思ってみれば」「思ってみたが」等用例が多いが、主節では用例が極端に少ないようである。〔CD-ROM 版 新潮文庫の100冊〕で調べた範囲では、「思ってみる」23例中、主節中の確例は1例のみである。1例でも用例があるのだからという議論もあり得るが、やはり少ないとは言えそうなので、疑いは残る。このあたりの微妙な部分は、今後対象コーパスそのものをよりよいものに変えて解

明していく必要がある。

(20)中の2例は、ほぼ、最も単純な形の共起例と言える。現在の共通語では若干不自然さがあり、「でみていません」「でみていないんですが」とでも言いかえるところかと思われる。ただしこれは資料の問題であり、質に目をつぶって当該資料を利用した以上、資料そのものの問題はひとまず棚上げにすべきで、この2例は、典型的な共起例と認めておく。

以上の結果を、前稿の「てしまう」の場合と比較してみる。「てしまう」と「ない」「ず」の共起例の場合、「ない」「ず」が典型的否定である可能性を持つものは7例であった(p.6, 「c その他」)。その7例の中には、反語的色彩の濃厚な疑問文や命令文などが含まれており、平叙文の用例は以下の2例のみである。

- (21) 一体こんな事は考えていると、だんだんわからなくなるものだが、まあ一通りは憶えているな。尤もおれの事だから、いくら侍従に憶れたと云っても、眼さきまで昏ん【でしまいはしない。】[芥川龍之介] (前稿 pp.6-7, (17))
- (22) 私だって精通するまでにはずいぶん長い時間がかかった。しかし一度精通してしまうと、言いかえれば一度そのコツを習得してしまうと、その能力は簡単に消え失せ【てしまったりはしない。】[村上春樹] (前稿 p.7, (18))

これらの用例は、「てしまう」と「ない」との間に「は」「たりは」などの要素が挟まれており、「てみる」の場合で言うと(15)(16)に近いタイプの用例である。「てみる」の場合における、(19)(20)のような例は見あたらない。

当該資料における、「てしまう」の総用例が11095例、「てみる」の総用例が5126例であることなども考えると、「てみる」は「てしまう」に比べれば、若干肯定封鎖表現としての性格づけに問題があるかもしれない。しかし、前稿でも述べたように、「ている」には、「ていない」「ていなかった」で終止する例が1000以上あり(ただし総用例数119152例)、「てみる」と典型的否定辞との共起例の少なさも顕著である。また、先述のように(19)(20)の用例にも全く問題がないわけでもなく、本稿では「てみる」は「てしまう」と同程度か、やや緩いながらも、肯定封鎖表現としての性格を持つと、結論づけておきたい。

### 3.2.2. 主節内の「ておく」

次に、主節内における「ておく」と「ない」「ず」との共起例を見る。共起例は95例であるが、前節と同様の分類を示すと、以下の通りである。



- a 「ない」「ず」が慣用句(「～なくてはならない」等)の一部をなすもの: 54例
- 「ておかねばならない」と、その派生形を含む形: 16例
  - 「ておかなければいけない」「ておかなければならない」と、その派生形を含む形: 9例
  - 「かもしれない」を含む形: 7例
  - 「ておかなくてはならない」と、その派生形(「ておかなくてはならん」を含む)を含む形: 5例
  - 「ておかないといけない」と、その派生形を含む形: 4例
  - 「ておいてはいけない」を含む形: 2例
  - 「にちがいない」を含む形: 1例
  - 「ておいてはならない」を含む形: 1例
  - 「ておかなきゃならん」を含む形: 2例
  - 「ておかなくちゃいけない」と、その派生形を含む形: 2例
  - 「ておかなくてはいけない」を含む形: 1例
  - 「ておかなけりゃならない」と、その派生形を含む形: 1例
  - 「ておかぬといけない」: 1例
  - 「ておくにこしたことはない」: 1例
  - 「ておくほかない」: 1例
- b 「～ではないか」等、慣用句とは言えないが、出現位置、文脈等から見て「ない」「ず」がモダリティを担う形式の一部として機能している(命題内否定でない)もの: 13例
- 「ておいてくれないか」: 6例
  - 「ておかない?」: 1例
  - 「ておいたはずではないか」: 1例
  - 「ておいてくれない?」: 1例
  - 「ておいているではないか」: 1例
  - 「ておけばよいじゃないか」: 1例
  - 「ておこうじゃないか」: 1例
  - 「ておくはずはない」: 1例
- c 「ないでおく」とその派生形: 8例
- d その他: 20例

95例中、a、bの67例は、「てみる」の場合同様、典型的否定との共起例とは見なせない。cの「[「ないで置く」とその派生形]」の用例は、例えば、以下のようなものである。

(23) 「いやだわ、お父さんたら、鯨みたい」

美幸は言った。

「いい気持そうだね、できるだけ起きない【でおいてあげよう】」

「起きなかったら、大変ね」[曾野綾子]

このような補助動詞形の前に直接「ない」がつくタイプの用例は、「てみる」「てしまう」には皆無であった。このタイプを通常の意味での「否定との共起例」とみるべきかどうかは、対極表現とは何かという問題、否定のスコープの問題等、理論的に詰めなければならない困難な問題が多く、ここでは扱いを保留したい(従って典型的な共起例の確例とは見ない)。

dの「その他」20例が、「ておく」と否定辞との典型的共起例の可能性を持つ用例である。スペースの都合で、疑問文の用例である5例のみ用例を省略し(p.12, 13行目参照)、残りの15例は、全て以下に挙げた。

(24) 体重が多すぎて試合が流れるということはあるうるが、少なすぎてできないなどということがあるのだろうか。いや、あるにしても、どうして体重に下限があるということを、プロモーターは徹底し【ておいてくれなかったのだろうか。】私の思いは内藤にも共通のものに違いなかった。[沢木耕太郎]

(25) 「伯父様のお仕打ちがあんまりひどいから、ぼくはもう、きみをあきらめてしまおうと決心したんだけど、でも別れたら、どんなに恋しく思うだろうなあ…。なぜ、以前にもっとたびたび、会っ【ておかなかったんだらう。】あの頃は会おうと思えばいつでも会えたのに」[田辺聖子]

(26) キリエ・エレイソン(主よ、憐れみ給え)漸く唇を震わせて祈りの言葉を呟こうとしたが、祈りは舌から消えていった。主よ、これ以上、私を放っ【ておかないでくれ。】これ以上、不可解なままに放っ【ておかないでくれ。】[遠藤周作]

(27) 「もちろん俺はあいつからそのことを聞いたとき、ほっ【ておきはしなかったよ。】あいつはこの俺には診てくれとは一言も言わなかったがね。まあ俺も大した医者じゃないから文句は言わないが、それでもやるだけのことはやっておいた。[北杜夫]

- (28) ドクターはもう少しそっとしておけというような仕草を示したが、私とエディはかまわず抱え起し、肩にかついでリングからおろした。韓国の観衆の前に長くその姿を曝し【ておきたくなかった。】内藤の体の冷たい汗が、私のシャツに沁み込んできた。[沢木耕太郎]
- (29) あなたたちはもう、これ以上、苦患に会うことはないだろうと司祭は熱意をこめて語った。いつまでも、あなたたちを主は放っ【ておかれはしまい。】我々の傷を彼は洗い、その血をふきとってくれる手があるだろう。主はいつまでも黙っておられないのだ。[遠藤周作]
- (30) 「これはいけない。こんな小さな子をひとりにし【ておけない。】今日明日にでもお迎えにくるからね、いい子でいるんだよ」  
父宮はさまざまに姫君をなだめておかえりになった。[田辺聖子]
- (31) 式部卿の宮は、  
「姫たちをたくさん持ってそれぞれに苦勞したから、もう懲りそうなものであるのに、まだこの真木柱のことが捨て【ておけない。】母君は年々物狂おしくなるばかりだし、父君の黧黒は私と仲良くないために離れているから、この姫がふびんでならぬのだ」とおっしゃって、新婚夫妻の部屋の調度までご自身命じたりなさるほどの、お心入れであった。[田辺聖子]
- (32) お母さんに問いつめられたら、そのお嬢さん《だって彼からは、ちゃんと問代とってるのよ》って言ったとか言うの。そんなことがあって、もう危険で置い【ておけなくなっただけでしょう。】遂に北海道へ強制的に連れ帰ったのよ」  
「ばっかじゃないのかなあ」[曾野綾子]
- (33) 悪魔がさもなくやしそうに口をだした。  
「きっとくるわよ。あいつはフン先生と、たいへんな仲よしじゃない。ほうっ【ておかないわよ。】あたいにもそんな友だちがほしい。ねえ、新しいブン、あたいとデートしない？ 結婚しない」[井上ひさし]
- (34) 彼も黙っていたかったが、年寄の車夫が彼を黙らし【て置かなかった。】郵便の簡易保険は如何いうものだろうかとか、A市の郊外に工場が出来るので、田より畑の方が値がよくなったとか、賛次郎の町の某の息子が新潟の医専を出て、市の病院へ来るのか、それとも町で開業するのかとか、そういう話題が尽きなかった。[志賀直哉]
- (35) 桃子はほっとため息をつき、輝かしく藍色にひろがる海を見やった。打寄せるものうい波音を聞いた。すると、彼女の頭の中には、こういう涙ぐましい考えが、抜きさしがたく形造られてくるのだった。

「あたしも恋愛をしなれば。聖さま、あなた一人を不幸のままにし【ておかないわ】」[北杜夫]

- (36) 今回のソウルは、契約が済みしだい帰るつもりだったので、ホテルを取っ【ておかなかった。】崔の事務所に連絡し、プラザ・ホテルのコーヒESHOPで待った。二時間待たせたあげく、やっと姿を現わした崔が、席につくや否や発した第一声は、あいつまだサインしないんだ、というものだった。[沢木耕太郎]
- (37) だが、戦局の推移は、この一つだけとび離れた島をいつまでも安穩なものにし【ておかなかった。】ガダルカナル島を完全に奪取した米軍は、やがて飛石作戦に出、六月三十日、レンドバ島に上陸、八月十五日、ペララペラ島に上陸、次はラバウルに次ぐ拠点ブーゲンビル島を狙っていることは火を見るよりも明らかといえた。[北杜夫]

上記のうち、(24)(25)は疑問文における例である。疑問文の用例は、この二つの他にも5例、計7例ある。7例ともが、すべて「なぜ」「どうして」を伴うタイプの疑問詞疑問文であることが注目される。また、7例のいずれもが、反語的ニュアンスを伴っており、これらが「ておく」と否定辞の典型的な共起例でないことがうかがえる。(26)の2例は命令文である。

(27)から(29)の3例は、否定辞は命題内否定と解釈できるが、「ておく」と否定辞との間に他の要素が入っている。(30)(31)は、「ておく」の可能動詞形「ておける」の用例である。

より重要なのは、(33)～(37)の5例である。この5例に関しては、「ておく」と否定辞の、最も典型的な単純形であることについて、現在のところ疑いを存しない。最も単純な共起形の例が5例であるという、この数については、「ている」の場合に比べてかなり少ないとは言える(「ている」の場合、総用例数119152例中、「ていない」「ていなかった」で終止する例が1000以上ある)が、疑いを存しない単純共起例が一つ二つではなく存在することを重視して、「ておく」が(主節かつ典型的な否定辞との共起にかぎっても)肯定対極表現と見なせるかどうかについては、ひとまず保留したい。否定辞との単純共起例が量的に本当に少ないかどうかを確実に明らかにするためには、使用する資料そのものを変更する必要があると思われる。

### 3.3. 調査結果(3)

ここでは、従属節における「てみる」「ておく」と否定辞との共起について見る。結果の概略を先取りすれば、従属節においては、「てみる」も「ておく」も、相当

数の典型的否定辞との共起例を持つ。それぞれの例を一部のみ挙げる。(38)～(40)が「てみる」、(41)～(43)が「ておく」の用例である。

(38) ……そこには、仕立屋があつたり、肉屋があつたり、雑貨屋があつたりして、それらの上に決して動かない道々が、網の目のようにからみつき、その道筋一本変えるにしても、役所をめぐる、何年もの争いをしなければならなかったのだ……だれ一人、その不動を疑つ【てみさえしなかった、】古い町々……しかし、それらも、直径1/8mmという、流動する砂の法則には、ついにうちかつことが出来なかったのだ。[安部公房]

(39) <なかなかの働き者じゃな！>

雪州はそう思ったが、会議の中へ慈念を入れて聞い【てみないことには】結論が出そうもないので、もう一と声、大きく叫んだ。

「慈念」

その声で慈念はもっていた竹棒をばたと落した。驚いたようであつた。雪州の方をきょとんと見ている。[水上勉]

(40) 「足が濡れるから、五月さんは上で見てなさいよ」

と言った。しかし五月さんは、

「なんだって、手を汚し【てみないと】わかんないって言うじゃないの」

と答えた。だから五月さんて好きなんだ、と太郎は思っている。[曾野綾子]

(41) 今わたしは床の上に腰を浮かせながらその場に釘づけのかたちになったというのは、これまで独りぎめの想像に敵が隣室から来襲するものとのみ考え、相変らず堺の襖ざわにはがらくたの砦を築いておいたのだが、庭手は万一のときの逃口と何の防ぎもし【ておかなかったためで、】構らずもこちらの虚をつかれ雨戸が鳴り出したとなると、さてどこへ逃げたらよいのか、[石川淳]

(42) 「ゴム手袋はしっかり乾かし【ておかないと】べとべととしてやりきれないな」と管理人はいい、艶のない、日焼けした皮膚で包まれた頑丈な首をうなだれて、手袋の中の指を執拗に動かし続けた。[大江健三郎]

(43) 「我々はあんた方の思考システムを徹底的にトレースしました。そしてそのシミュレーションを作りあげて、メイン・バンクとして保存することにした。そうし【ておかないことには】もしあんた方の身に何かがあったときに身動きがとれんですからな。保険のようなものです」[村上春樹]

従属節における「てみる」「ておく」の否定辞との共起状況は、出現の比率はも

もちろん同じというわけではないが、概ね前稿「てしまう」の場合と同じである。すなわち、用例中、慣用句・モダリティ内否定といった、非典型的な否定辞との共起例の方が多く存在するものの、典型的な否定辞との共起例も相当数にのぼる。従って、「てしまう」の場合と同様、「てみる」「ておく」の、従属節の状況からは、肯定対極表現としての性格は見いだせないということになる。

#### 4. まとめ

結論の概略を繰り返せば、

- (44) 主節・従属節合わせた全体でみると、「てみる」「ておく」の、否定辞との出現率は低い。
- (45) しかし「てみる」の、主節における状況は、否定辞の典型的用例との共起例が極端に少なく、前稿「てしまう」の場合の状況に近い。主節における「てみる」には、肯定対極表現の性格が認められる。

「ておく」に関しては、主節・典型的否定との共起という条件の下でも、ある程度の数の否定辞との共起例が見いだされたため、今回の調査では肯定対極表現であると認めることは保留した。とはいえ、最も単純な共起例は5例、他に他の要素を挟んだ例を加えても8例程度であり、今後、調査の質と量が向上されれば、一定の肯定対極表現としての性格を認めることが可能になるかもしれない。

この種の調査においては、対象となるコーパスの問題は常につきまとう(注3)。本稿・前稿の調査においても、『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』を対象資料とすることに当然デメリットもあったわけであるが、調査には時間的・労力的等の制約が必ずあり、当該資料を利用した目の粗さにもかかわらず、前稿の「てしまう」、本稿の「てみる」に、一定の肯定対極表現としての性格を確認できたことは意味があったと考える。調査の「目の細かさ(粗さ)」は相対的なものであり、時間的・労力的条件が整えば、質・量ともにさらに上の、あるいはタイプの異なったコーパスを利用することが常に求められている。当面の課題としても、

- (46) 「ておく」の(特に主節における)否定辞との共起例の、総用例数に対する比率が低いということは、さらに大規模なコーパスにおいても言えるのか。
- (47) 「てみる」の従属節における否定辞(の典型的用法)との共起も、さらに大規

様なコーパスにおいても少ないと言えるのか。

等、興味深い論点が残されている。

今回、「てみる」が主節において、「てしまう」と同様、否定辞（の典型的用法）と共起しにくいことが分かったことにより、非常に僅かではあるが、この種の補助動詞が否定辞と共起しにくい理由についても、可能性が絞られた。それは、例えば、「てしまう」の「完了」というような意味に、その根拠を求めることはできない、というようなことである。前稿の時点では、現代語「てしまう」と、古典（主として奈良・平安語時代）語の助動詞「つ」「ぬ」の共通性を重視して、（あるタイプの）完了性と否定とになんらかの不親和性がある、というような根拠を探る可能性が残されていた。しかし、「てみる」にも同様の肯定対極性が見いだされた以上、その方向の根拠を探るのは、少なくとも直接的な形では難しくなったと思われる（注4）。今後は、コーパス的に（少なくとも古典語よりは）恵まれている現代語のコーパスの中で、（典型的な）否定辞と共起しやすい形式と共起しにくい形式とを選び分け、共起しにくい形式群内の共通点を探るというのが、ひとつの筋道であると考えられる。

## 注

- 1 出現している「(て)みる」「(て)おく」が補助動詞か本動詞かの判定は、「(て)しまう」「(て)いる」の場合より微妙な例が多い。今回の調査では本稿筆者以外に2名の日本語母語話者に依頼し、各々の用例が「確実に補助動詞用法」「どちらの可能性もあり得る」「確実に本動詞用法」の3通りに判定してもらい、どちらかでも「どちらの可能性もあり得る」以上に判定されれば採用する、という、補助動詞用法を広く取る方法を取った。
- 2 主節・従属節の区別は前稿（橋本・松本2000）、注2と同じ基準に従った。ただし、当該箇所不十分な記述があったので、ここで補足する。
  - ・一部の作品では、心内発話に（ ）<>等を用いるものがあるが、これらの扱いは、「 」と同じとする。
  - ・「。」「!」「?」等の後に引用マーカーが現れる場合の扱いについて分かりにくい記述になっていたが、この場合は主節とする。（橋本・松本2000の段階でもそのように取り扱ったが、注2の記述が不明確であった。）
- 3 田野村1995、荻野2001、杉本2001、松田2001他参照。
- 4 古典語「つ」「ぬ」が否定辞と共起しにくいことについて言えば、（もし現代語「てしまう」「てみる」との共通性を重視するなら、）前稿で「確述」の意味を原因とすること、本稿で「完了」の意味を原因とすること、の二つに否定的な（間接）証拠が現れたということになる。ただし、このような原因づけが、先行研究の中で行われていた、ということではない。なお、前稿の後、高山善行氏から「つ」「ぬ」のモーダルな意味、否定辞

との共起に関して、近藤明 1989、高山 1998 の論考をご指摘いただいた。本稿では古典語「つ」「ぬ」には考察が及ばず、両論考の指摘を十分に生かすことはできなかったが、ご教示に多謝申し上げる。

#### 参考文献

- 鮎澤孝子 1990 「新聞と否定表現」『日本語学』9-12  
石神照雄 1990 「否定と構文」『日本語学』9-12  
井上優 1990 「「だろうね」否定疑問文について」『日本語学』9-12  
井上優 1994 「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐって」『国立国語研究所研究報告集』15  
太田朗 1980 「否定の意味」大修館書店  
萩野綱男 2001 「計量日本語学の考え方」『日本語学』20-5(4月臨時増刊号)  
近藤明 1989 「助動詞ツ・ヌに否定辞が下接する場合 ―ヌ+デを中心に―」『国語学研究(東北大学)』29  
須賀一好 1995 「「かもしれない」の意味と蓋然性」『山形大学紀要』13-2  
杉本武 2001 「文法分野での計量的研究概観」『日本語学』20-5(4月臨時増刊号)  
鈴木智美 1998 「「～てしまう」の意味」『日本語教育』97  
鈴木英夫 1976 「「なく(て)」と「ないで」と「ず(に)」の用法の異同について」『名古屋市立大学教養部紀要』A20  
須田義治 1991 「「なければならない」の文」『東京外国語大学日本語学科年報』13  
高山善行 1998 「中古語の叙法副詞 ―カナラズの構文的機能と意味」『国語論究7 中古語の研究』明治書院  
田野村忠温 1988 「否定疑問文小考」『国語学』152  
田野村忠温 1991 「疑問文における肯定と否定」『国語学』164  
田野村忠温 1995 「パソコン利用の現状と課題・意味」『日本語学』14-8(臨時増刊号)  
中右実 1994 「認知意味論の原理」大修館書店  
長野ゆり 1995 「「～ておく」の用法について」『現代日本語研究(大阪大学)』2  
長野ゆり 1998 「仮定を表す「～てみる」の用法について」『日本語教育』96  
成田徹男 1981 「補助動詞と本動詞―「みる」「みせる」を例に」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』明治書院  
野田春美 1992 「複文における「の(だ)」の機能 ―「のではなく(て)」「のでは」と「のだから」「のだが」―」『阪大日本語研究』4  
野田春美 1995 「「～ハ～ナイ」、「～シハシナイ」、「～ノデハナイ」、「ワケデハナイ」―ハとナイを含む否定の形―」『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版  
野田春美 1997 「「の(だ)」の機能」くろしお出版  
橋本修・松本哲也 2000 「「～てしまう」と「ない」の共起について」『筑波日本語研究』5



- 飛田良文 1972 「完了の助動詞」『品詞別日本文法講座』8 明治書院
- 松本正恵 1997 「見る」の文法化 「てみると」「てみれば」「てみたら」を例として」  
『早稲田日本語研究』5
- 松田謙次郎 2001 「コーパス調査と計量的研究」『日本語学』20-5(4月臨時増刊号)
- 森田良行 1977 「おく」「みる」『基礎日本語1』角川書店
- 守屋三千代 1995 「動詞テ形の連用機能と末尾動詞との相関」『日本語日本文学(創価大学)』5
- 山森良枝 1994 「コミュニケーションと疑問文」『神戸大学留学生センター紀要』2
- Greenberg, Joseph H. (ed.) 1978 *Universals of human language*. Vol.4. Syntax Stanford Cal.  
: Stanford University Press.
- Horn, Laurence Robert. 1978 *Some aspects of negation*. Greenberg (ed) Vol.4.
- Kato, Yasuhiko 1985 *Negative Sentences in Japanese*. Sophia Linguistica 19, Sophia University.
- Takubo, Yukinori 1985 *On the Scope of Negation and Question in Japanese*. Papers in Japanese Linguistics 10.

#### 用例資料

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』(発行:新潮社/発売:NECインターチャネル)所収の、日本人作家による67作品全て。以下、作家名(五十音順)・作品名(文庫のタイトル)の順で示す。

赤川次郎「女社長に乾杯!」、阿川弘之「山本五十六」、芥川龍之介「羅生門・鼻」、安部公房「砂の女」、有島武郎「小さき者へ・生まれ出づる悩み」、有吉佐和子「華岡青洲の妻」、池波正太郎「剣客商売」、石川淳「焼跡のイエス・処女懐胎」、石川啄木「一握の砂・悲しき玩具」、石川達三「青春の蹉跎」、泉鏡花「歌行燈・高野聖」、五木寛之「風に吹かれて」、伊藤左千夫「野菊の墓」、井上ひさし「ブンとファン」、井上靖「あすなろ物語」、井伏鱒二「黒い雨」、遠藤周作「沈黙」、大江健三郎「死者の奢り・飼育」、大岡昇平「野火」、開高健「パニック・裸の王様」、梶井基次郎「檸檬」、川端康成「雪国」、北杜夫「楡家の人びと」、倉橋由美子「聖少女」、小林秀雄「モオツァルト・無常という事」、沢木耕太郎「一瞬の夏」、椎名誠「新橋烏森口青春篇」、塩野七生「コンスタンティノーブルの陥落」、志賀直哉「小僧の神様・城の崎にて」、司馬遼太郎「国盗り物語」、島崎藤村「破戒」、曾野綾子「太郎物語」、高野悦子「二十歳の原点」、竹山道雄「ビルマの竖琴」、太宰治「人間失格」、立原正秋「冬の旅」、田辺聖子「新源氏物語」、谷崎潤一郎「痴人の愛」、筒井康隆「エディプスの恋人」、壺井栄「二十四の瞳」、中島敦「李陵・山月記」、夏目漱石「こころ」、新田次郎「孤高の人」、野坂昭如「火垂るの墓」、林芙美子「放浪記」、樋口一葉「にぎりえ・たけくらべ」、福永武彦「草の花」、

藤原正彦「若き数学者のアメリカ」、星新一「人民は弱し 官吏は強し」、堀辰雄「風立ちぬ・美しい村」、松本清張「点と線」、三浦綾子「塩狩峠」、三浦哲郎「忍ぶ川」、三木清「人生論ノート」、三島由紀夫「金閣寺」、水上勉「雁の寺・越前竹人形」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、宮本輝「鐘籠」、武者小路実篤「友情」、村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」、森鷗外「山椒大夫・高瀬舟」、柳田国男「遠野物語」、山本周五郎「さぶ」、山本有三「路傍の石」、吉村昭「戦艦武蔵」、吉行淳之介「砂の上の植物群」、渡辺淳一「花埋み」

〔付記〕

本稿は、平成11,12年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)「日本語否定形式の分布実態と、その意味論的・語用論的背景の解明」(研究代表者：橋本修、課題番号：11710222)による成果の一部である。また前稿(橋本・松本2000)も同様である。

(2001年6月28日 受理)